

51. 長居公園

所在：長居公園1-1



総面積 65.7ha. 大阪を代表する総合公園です。天王寺、大阪城、靱公園に並ぶ市内の大公園です。元は鷹合村、保利村、寺岡村が隣接する灌漑池がある田畑でした。目立つものは臨南寺とその周りのうっそうとした森でした。1928年から大阪市の都市計画として長居公園の整備計画が始まりました。大阪市が公園予定地の買収などをおこないました。開園は戦時中の1944年4月1日でしたが、実態は高射砲陣地と食料生産の農地に転用されました。公園は終戦後、競馬場（大阪競馬場）、競輪場（大阪中央競輪場）として使用され、戦後の大阪市の財政を助きました。

競馬は昭和34年（1959年）、競輪も昭和37年（1962年）に廃止されました。

昭和34年（1959年）から本格的な都市公園として整備され、球技場・競技場では平成9年（1997年）国民体育大会（なみはや国体）、平成19年（2007年）世界陸上

が開催され、Jリーグ・セレッソ大阪がホームスタジアムとして使用しています。

公園内ではウォーキングやランニングをする姿が多く見られ、長居ユースホテルには世界中から宿泊に訪れています。

自然史博物館・植物園などには珍しい展示物や植物が数多くあり、見学の人でにぎわっています。

2022年に民間委託された長居公園は集客性のある施設を備えた公園へと大規模リニューアルされました。

52. 長居配水場

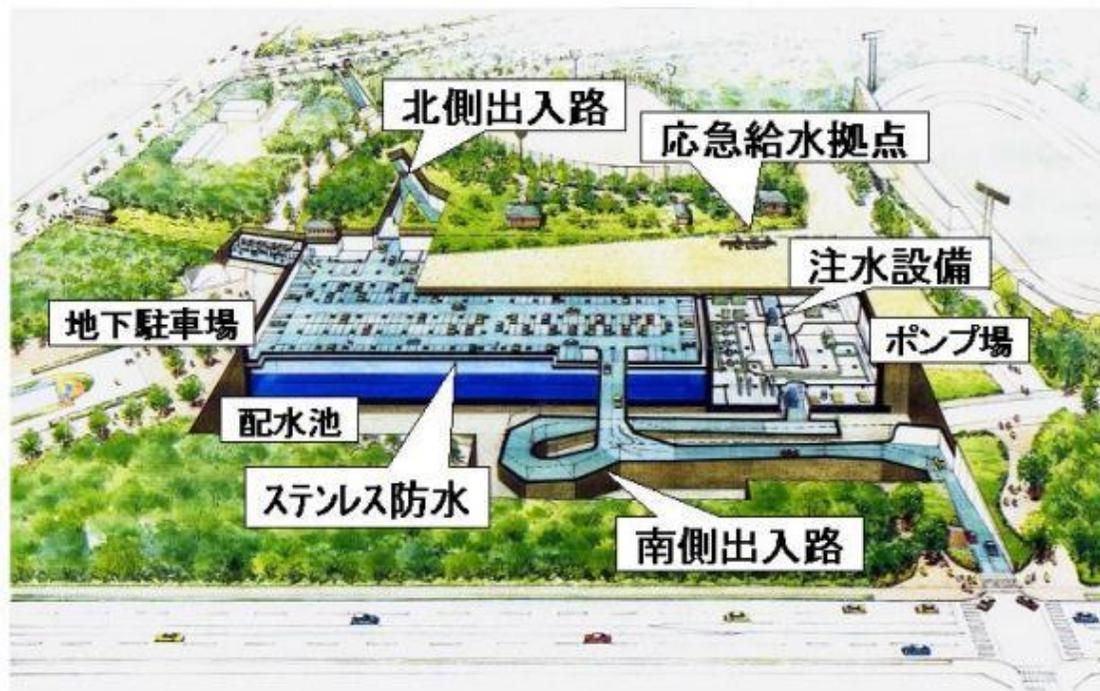
所在：長居公園1-1

平成16年（2004年）9月14日供用開始。

この「長居配水場」は、阪神・淡路大震災を教訓として、市内においてバランスのとれた給・配水拠点の整備を図ることを目的に建設されたものです。

この配水場により、東住吉区、平野区、住吉区、阿倍野区にまたがる市南部地域において、平常時の配水管の水圧が向上するほか、震災等緊急時の配水拠点として、給水の安定性が向上します。

また、大規模な災害時には応急給水の運搬基地として機能することにより、周辺地域における迅速な応急給水体制の確立が可能となるなど、広域避難場所である長居公園の防災拠点機能を大幅に向上させることができます。



53. 中井神社

所在：針中野2丁目3-58

中井神社は、^{さんだいじつろく}三代実録（延喜元年（901年））という書物に摂津の国「田辺^{ひがしのかみ}東神」と記されており、古くは、ご祭神にちなんで「^{ごずてんのうしや}牛頭天王社とよばれていました。その昔、社前に、清水の湧く井戸があり、人々は、「^{けが}汚れない霊水」としてたいせつにしていたので、中野村の井戸の有るところのお社として、明治時代の初めに中井神社と改められました。（中井神社発行の神社暦による）中井神社の東神に対し西神が^{さん}山阪神社といわれています。

境内に、根元5mほど残った^{えのき}榎は、世に異変のあるときは必ず夜間に轟音がすると言いつたえられていました。現在、社殿の右前に白龍社のご神木として祀られています。

また大阪市の保存樹林に指定された、大楠、^{いちよう}公孫樹、メタセコイヤ、^{おがたまのき}小賀玉木があります。元日未明には（午前0時の合図とともに）初詣の参詣者に、干支いりの「かわらけ」で、お神酒が授与されます。毎年除夜の鐘が鳴り出すと長い初詣の行列ができます。又、古くから安産の神として、有名であって、妊婦が、神前の、鈴の緒を頂いて、腹帯にすると、安産が出来ると言いつたえがあります。

毎年、夏祭り神事は7月12日・13日に行われますが、その直前の日曜日に行われる神輿巡行の際に、小中学生などが、掛け声とともに整然とたたく枕太鼓は50年以上にわたり受け継がれてきた伝統行事で、一見に値すると思われれます。また神輿巡行は、^{さるたひこのみこと}猿田彦命の装束で、（北ブロック、南ブロック各年交互に）行列を先導します。

笑福亭^{しょうきょう}松喬一門会の落語会が、昭和56年（1981年）から約30年間開催されていました。



54. ^{なかとみすむちじんじゃ}中臣須牟地神社

所在：住道矢田2丁目9-20

矢田^{すんじ}住道の地域にあるひっそりとした神社ですが、^{えんぎしき}延喜式の格式ある神社です。祭神は^{なかとみすむちのかみ}中臣須牟地神とともに住吉大神（^{うわつつのおのみこと}表筒男命・^{なかつつのおのみこと}中筒男命・^{そこつつのおのみこと}底筒男命・^{おきながたらしひめのみこと}息長帯比売命）を祀り、中臣氏と住吉大社とのゆかりを感じさせます。「^{すむち}須牟地」の名がつく神社は他に「^{かみすむち}神須牟地」、「^{すむちそね}須牟地曾祢」があり、今は遷座していますが元はそれぞれ^{しはつみち}磯齒津路沿いにあったといわれています。

磯齒津路というのは倭の五王の時代（古墳時代）にあった^{すみのえのつ}住吉津から喜連に通じる道で新羅など外国からの使節が飛鳥に向かう道でした。「須牟地」には磯齒津路の路の神であり使節の休息所といった意味があったようです。中臣須牟地神社も当時は現在地より北方の磯齒津路沿いに天神山という小高い丘の麓（現在の矢田北小学校あたり）にあり、外国の使節が来ると摂津、河内、大和から集めた稲で御神酒を醸し使節を歓待しました。その接待役が中臣氏でした。中臣氏はこの地域とつながりが深く、子孫の藤原不比等が、現在^{住道(須牟地)廢寺跡}となっている寺を建立したといわれています。

古代から鎌倉時代まで天皇即位後の^{だいじょうさい}大嘗祭の翌年、^{なにわつ やそしままつり}難波津で八十島祭という儀式が行われており、中臣須牟地神社はそれにも関わった由緒ある神社と伝わります。

のちに天神山麓にあった中臣須牟地神社の地域が河内国^{たじひぐん}丹比郡に編入されたため、摂津の地域に中臣須牟地神社の祭神の一座、中筒男命を勧請して出来たのが^{湯里住吉神社}といわれています。



（参考文献：東住吉区史、東成郡誌、大阪府の地名）

55. 中野のはり

所在：針中野3丁目2-17



現在も駅名が継続され、地名となって残っています。

当時では珍しく遠くから見えた3階建ての塔屋敷は、老朽化したために昭和50年（1975年）に取り壊されました。

なかのしんきゅういん
中野鍼灸院は平安時代の延暦（782年～805年）の頃に設立された、なかのあまくだるはりや「中野降天鍼療院」がその屋号です。

平安時代から一子相伝を守り、男児が恵まれない時は、女性も当主としての鍼灸術を習得して、現在に至っています。

43代目当主の言によれば、以下のような長期にわたる経歴がわかります。

初代の治平氏は延暦20年（801年）生まれ、平安初期に弘法大師が布教の途上、当家に宿を借りたお礼として、当時最も進歩した鍼術とつぼを示す「すいけつぐうぞう遂穴偶像」（大人と小人の丈1m弱の木像）と金針を授与されとのことです。

その木像は現在も中野家に伝えられています。

3代目当主は年度が不明ですが、旧暦満月の8月15日に開業されたので、「月見の鍼」と呼ばれ、今もその治療に訪れる人が多いといわれています。

南北朝の頃に、足利軍の戦火により屋敷を焼失したが、大師伝授の木像2体と鍼と漢方薬書が残り、今日に至っているとのことです。

宝暦13年（1763年）発行の撰津平野大絵図にも、中野村小児鍼師と記されています。明治の頃、第41代目当主は医師の資格を取得された上で、西洋医学を取り入れて独自の鍼法を築かれたので、近畿一円から「中野鍼まいり」として、一日500人以上の人々が殺到し、屋敷内に遠路の来館者を泊める宿舎も建てられていました。

大正3年（1914年）に南海平野線が開通した時には、中野駅から鍼院まで7ヶ所の道辻に石の道標が建てられました。

大正時代に中野家41代目が大阪鉄道（現近鉄南大阪線）の開通に尽力し、そのお礼として大正12年（1923年）の開通時には最寄りの駅名を「針中野」としたといわれています。

56. なにわ大放水路

市勢の発展に伴ってこれまで雨水を保水してくれた、田畑や池沼が少なくなり、集中降雨の際には下水道の整備された地域であっても、低地ではその処理能力を超える雨水が一挙に集中し、洪水被害が発生していました。

こうした都市型浸水は大阪市の東南部において特に深刻であり、その抜本的対策として「なにわ大放水路」の建設が行われました。工事は昭和59年(1984年)に着手され、平成12年(2000年)に完成の16年にわたる大工事で、別図に示す大規模なものでした。

総延長12.2km、最大仕上り内径6.5mの大下水道幹線で、地下約30mに建設されています。一方、この幹線に集めた雨水を住吉川に排除するポンプ場である住之江抽水所の計画排水能力は毎秒73立米であり、大阪市最大の抽水所であります。

・ 住之江抽水所の概要

なにわ大放水路によって集められた雨水を住吉川に排除する施設で、雨水排水のため口径2.2mの主ポンプを6台設置し、流入する幹線が地下約30mと深いために、施設の大部分が地下構造物となっています。

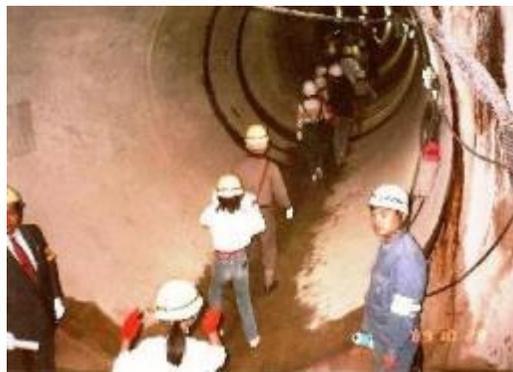
このような構造物を早くて、安く、しかも安全に施工するために、地下部分は円筒形(外径81m)の施設になっています。

流入してくる雨水には、砂などが混じっているので、ポンプ室の後に配置されている沈砂池で雨水をゆっくり流して砂を沈め取り除きます。

また、建物の屋上に降った雨水を利用した「せせらぎ」や、施設の上部を有効利用した「多目的グラウンド」を設けるなど、広く市民が憩い親しめるような施設になるように配慮されています。



大阪市建設局ホームページから引用



平成元年(1989年)なにわ大放水路見学会1



なにわ大放水路見学会2

東住吉100物語

川・堀（環濠）・橋

57. 鳴戸川

所在地：中野1丁目8-西今川1丁目



中野橋から下流側の展望



東平和橋から上流側の展望

大阪府の河内平野西部・上町台地寄りを流れる、^{へいや}今川に注ぐ小支流です。

改修前の鳴戸川は、平野川を源流とし平野の東側の水田地帯を潤す^{かんがい}灌漑用と排水用の水路です。東住吉区内では中野2丁目の方から西流し、中野1丁目^{かんがい}で今川にぶつかる直前に、今川に並行して北に流れていた川で、今川とは合流していませんでした。また、今川小学校の南側の今川2号橋辺りの西脇水路は、鳴戸川改修の折、^{あんきよ}暗渠になったものと思われます。現在、其の辺りに鳴戸川へ注ぐ排水口らしきものが設けられています。

古い地図には、今川のうるし堤を過ぎても、なお今川沿いに北上し、杭全で駒川と同時に平野川に注ぐように描かれているものもありますが、現在はそういった流れはありません。

育和橋近くで、昭和元年(1926年)生まれの方に聞くと、「鳴戸川と今川に架かる二つの橋を渡っていた」という証言があり、鳴戸川は、今よりもずっと北の方で今川と合流していたことがわかります。

改修後の鳴戸川は中野1丁目^{かんがい}で今川から分流し、今川に平行して北上し、今川1丁目のうるし堤公園の北端で、今川右岸に注いでいます。

今川は、曲がりくねった天然の川ですが、鳴戸川は人工的な直線状の水田^{かんがい}灌漑用、治水用の川でした。

戦後、東住吉区は住宅地として著しく発展し、昭和24年(1949年)から駒川・今川・鳴戸川・平野川を改修するとともに、合わせて下水工事が行われました。

昭和29年(1954年)に今川の改修工事が完成、昭和36年(1961年)に鳴戸川の改修工事が完成したことを記念して、今川福祉会館の前に石碑が建てられました。

今川から鳴戸川の分岐点及び今川への合流点



所在地：中野1丁目9



うるし堤公園北端
うるし堤公園北端から合流地点を望む



昭和36年（1961年）の鳴戸川改修時に、この場所より上流が消滅し、今川が源流となり現在のように分岐点となりました。
今川と鳴戸川の分岐点にある水辺のデッキ付近ではカルガモ親子が住んでいます。
また5月末～6月初にコイが産卵します。
春の桜も美しく、四季の楽しめるところです。

58. 南海鉄道平野線(廃線)の今昔

道路・街道・交通

大正2年(1913年)阪南電気軌道が、計画し、同年阪堺電気軌道に合併、大正3年(1914年)阪堺電気軌道株式会社が今池・平野間に平野線を開業、翌年、南海鉄道株式会社と合併、南海電気鉄道平野線となりました。

昭和4年(1929年)には、上町線と平面交差する阿倍野斎場前交差点で平野線から右折して、乗り換えせずに直接天王寺駅へ乗り入れられるようになりました。

第2次世界大戦中、昭和19年(1944年)戦時企業統合政策で関西急行鉄道と合併、近畿日本鉄道平野線となり、戦後、昭和22年(1947年)に再び南海電気鉄道平野線となりました。昭和55年(1980年)平野線の軌道の地下に市営地下鉄谷町線が開通したことに伴い、同年11月に平野線は(東住吉区内には、田辺、駒川、中野の三つの駅があり大変便利でしたが)営業を廃止しました。現在、東住吉区内には、大阪メトロ谷町線の田辺駅と、駒川中野駅があります。また平野線のもと軌道の上には、阪神高速松原線が開通し、環状線方面駒川出入り口があります。

昭和55年(1980年)11月廃線の写真



「ちんちん電車」のこと

昭和30年(1955年)頃までは、平野・中野駅間は、ほとんど家は無く、一面田んぼと畑でしたので、とても見通しがよく、約1.6km向こうの平野駅を出発する電車が、中野駅から、よく見えました。平野線は、通称「ちんちん電車」として親しまれていました。屋根にあるトロリーポールは、電車に電気を取り入れるために、上下左右に動くポールの先にくるくる廻る車の付いたものです。この車の凹部を、ポールに付いたばねで軌道の上に張られた架線に押し付けて、電気を取り入れながら走っていました。しかし、平野線から天王寺駅前方面へ向かう電車は、阿倍野斎場前で交差点を右折しなければならず、架線が交差している為、そのままでは走れません。此処では、右折直前に、車掌は窓から上半身を乗り出し(雨の日も、風の日も)親指を通す穴の開いた革のシートで、ポールの先に結わえられたロープを掴んで手繰り寄せ、ポールの先の車を架線から外します。電車は、一次的に停電しますが、惰力を使って右折を完了し、車掌はポールの先の車を天王寺方面の

架線に移します。たまには失敗し、ショートして強い^{せんこう}閃光が走り、ドンと音がしてブレーカーが飛び再び停電します。(余談ですが、昔、阿倍野斎場あたりでは、焼き場や墓があったので、夜、人魂が見えるとの噂がありました。) ポールをセットし終わると、車内に張られたロープ引いて、運転手の横にある「かね」を鳴らし作業完了を連絡していました。運転手は、運転室の足元にある直径4～5センチの真ちゅう製の、押しボタンを、足で踏んで「チン」と鳴らし、発車の合図や、周囲への注意喚起に使用していました。



「ちんちん電車」の、車掌さん、運転手さん

お年寄りが幼い孫を連れていたり、母親が幼い子どもらを連れて乗ると、車掌や運転手は、乗り降りに自然と手を貸してくれました。また、子どもが降りるのを忘れていたら声をかけてくれました。今のように、際立って福祉の、介護の、ボランティアのとは言わず、自然に弱いものに手を差し伸べることができる、差し伸べてもらえる、安心のよき時代でした。

59. 梅花橋から清水橋へ

所在：今川4丁目23

[今川](#)と西除川の関係について、元大阪大学大学院教授・村田路人先生が、土橋家文書を引用され、「今川と西除川は平行して北上しているものの、全く別の川で、今川の墓地の辺りで堤一本を境界として接近しているが、結局は現在の桑津で両者が合流するまでは独立した川であって、大和川付け替え工事以前から、両者が併行して存在した」ことを述べられました。（平成18年（2006年）10月の平野区画整理記念会館でのご講演）

区内の歴史研究家の「[山阪神社](#)と[中井神社](#)の氏子境界線が西除天道川の川跡ではないか」という話をきっかけに触発されて、調査したところ、梅花橋と清水橋（東側が今川墓地）の間110mが、[庚申街道](#)筋の堤を介して接近していたことがわかりました。

写真はその接近点を示します。この区間は春には桜が美しく、秋は曼珠紗華（彼岸花）が美しい場所であります。



60. 俳優記念碑

所在：北田辺6丁目11-4

友愛センター 北田辺の前に、明治43年（1910年）建立の石碑があり「俳優記念」と刻まれています。

明治の中頃に文楽の役者が住んでおり、その人の指導で、この地に浄瑠璃が盛んとなり、これに芝居も加えて「山坂連中」と名乗り、近郷切っての人気一座だったと伝えられています。

この「山坂連中」のメンバーにより記念として、この石碑が建立されたものです。

